

鷗外初期の文学観：批評活動から創作へ

著者	伊藤 敬一
雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	82-93
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019269

鷗外初期の文学観

——批評活動から創作へ——

伊藤 敬一

(一)

『しからみ草紙』は、『国民之友』に掲載した『於母影』の印税五十円を基とし、明治二十二年十月二十五日に創刊号を出し、新声社を発行所として引き続き同人の協力を得ることになった。「しからみ」は後に「柵」とも書かれ「滔々たる文壇の流に柵をかけると云ふ意味」(『柵草子のこと』)と鷗外もいのように文界の「蕩清の功を速にせんと欲する」(『しからみ草紙の本領を論ず』)意欲的なものであった。したがって文学評論が中心になるところであったが、創刊号に集った原稿で評論文といえるのは鷗外の演劇論のみであり、「大書シテ文学評論ト申サンモ裏恥カシキ」(市村讚次郎宛書簡 明22・10・8)ということで、予定していた「文学評論」なる誌名は角書として残すにとどまった。

巻頭に掲げられた『しからみ草紙の本領を論ず』は鷗外の文学宣

言であるが署名はS・S・Sである。これは発行事情を考慮してのこと
で、鷗外自身の意図と文学観が反映している。

西学の東漸するや、初その物を伝へてその心を伝へず。学は則格
物窮理、術は則方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知り
て、その徳義の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや。

「西学東漸」の認識から説きおこすところには医事活動との関係
のふかさがうかがえる。鷗外はドイツ留学から帰国後、西欧医学の
実状や方法をふまえて啓蒙的な医事活動をはじめた。とくに明治二
十二年一月『東京医事新誌』の主筆になってからは、日本における
学問研究の「創作」が行われることを願って強力な論陣を張った。

西欧との鎖国以来の遅れを取りもどし、急速に富国強兵をはか
り、日本の独立を遂げるためには西欧の科学技術を模倣・輸入する
のが手っ取り早く効果的であった。鷗外のことばに従えば「勉励模
倣」することが日本の知識人や指導者の使命であったわけだ。鷗外

はこのことばを『リッヒャルド・ゲシャイドレン之伝』に書き記している。

千八百八十六年ノ事ナリシガ余民頭府ニ在リペッテンコーフェル君ニ從テ学ブ一日一胖大翁アリ余ガ試験所ニ入ルレーマン Lehmann ノ曰ク請フ君ヲブレスラウノ教授ゲシャイドレン君ニ紹介セント余此時ニ於テ始テ其人ヲ見タリ渠曰ク日本人ハ勉励ノ民ナリ余曰ク勉励シテ模倣セリ未ダ勉励シテ創作セズ渠曰ク猶来ラン＝Eskommt noch！＝

このエッセイは明治二十二年五月の『東京医事新誌』に掲載されたのだが、「勉励シテ模倣セリ未ダ勉励シテ創作セズ」と学問研究創造への願いをこめて語ったのは明治十九年ミュンヘンに在ったときである。以来、鷗外は医学界に「創作」の起こることを折にふれ主張し続けてきたのだった。

「格物窮理」「方技兵法」の輸入は日本の現状からして止むを得なかったが、それは「勉励創作」ではなく、「唯利を是れ図り、財に」なるものを「勉励模倣」したのである。しかし、いまはこの傾向も変ってきた。直接利にはつながらない文学・哲学が紹介されるようになった。単なる「模倣」に終らせることなく「勉励創作」の実をあげようというのが『しからみ草紙』の本領である。つまり、医事活動における「勉励創作」が文学活動へ拡がってきたわけで、両者は表裏の関係にある。磯貝英夫氏もこの期の鷗外の思考特性を論じ、「医学の研究業績それ自体ではなく、研究をめぐる諸問題へ

の徹底的な論評は、文学作品ではなく、文学（芸術）の考えかたについて、これまた徹底した論評に見合うものである」（『啓蒙批評時代の鷗外―その思考特性―（上）』『文学』昭47・11）といっている。

鷗外の文学活動は『しからみ草紙』に始まったわけではない。明治二十二年一月『読売新聞』に『小説論』を掲載したのを皮切りに、かなりの翻訳、評論がある。しかし、大きな仕事はカルデロンの戯曲『調高矣洋絃一曲』、ドーデ『緑葉歎』、ホフマン『玉を懐いて罪あり』など弟篤次郎との英訳を含めての翻訳であり、新声社同人と共訳の『於母影』である。また今日、鷗外初期の文学活動を考えるとき、まず対象にされるのは『舞姫』『うたかたの記』『文づかい』三部作であり、『於母影』である。しかし、評論は数編に過ぎないが鷗外自身の文学活動における積極的な対象は評論にあったのだ。数少いとはいえ、評論には鷗外の「勉励創作」すべき文学がいかなるものが明確に語られているはずである。

(二)

『しからみ草紙』創刊までの評論を列記すると次のようになる。

明治二十二年

一月『小説論』（『読売新聞』）

三月『修行がしたい』（『読売新聞』）

四月『独逸文学の隆運』（『国民之友』）

四月『池袋清風君に一言す』（『読売新聞』）

五月『「文学ト自然」ヲ読ム』（『国民之友』）

六月『再び自然崇拜者に質す』（『国民之友』）

六月『吾局ノ文壇又タ一將ヲ得タリ』（『東京医事新誌』）

六月『掘出し物』を読む』（『国民之友』）

六月『文学上の創造権』（『読売新聞』）

九月『情詩ノ限界ヲ論ジテ猥褻ノ定義ニ及ブ』（『国民之友』）

このほか山田美妙の裸体画問題を時評風にあつた『裸で行けや』（二月『読売新聞』）のような短文が二、三ある程度で分量としてはさしたるものではないが、これらの文学論には、ドイツ留学で得た知識を援用して、文学という独自の価値体系を確立しようとする一貫した姿勢がみられる。

『小説論』は鷗外文壇への第一声であり、日本への最初のゾラ紹介としても知られている。「Cfr. Rudolf von Gottschall Studien」と副題があるようにゴットシャルの文学論に負うところが多い。なお、鷗外初期の文学論がゴットシャルを援用していることは神田孝夫氏『鷗外初期の文芸評論』（『比較文学研究』六号）小堀桂一郎氏『若き日の森鷗外』によって詳しく指摘されている。

「開明世界に嘖々たるゾラの実験小説論は「蓋し之を法蘭西著名の生理学者『クロウド・ベルナール』の著したる実験医学論に取れるなり」として、ベルナルの所説を「今の学問は視察（「オペセルワッション」と実験（「エキスペリマンタション」との二に基くなり」

と紹介する。ここでは専門の医学の研究と経験が生かされている。そしてゾラの実験小説論に及んで次のようにいう。

夫れ分析と解剖とは之を小説の結構に用ゆること固より不可なるなし然れども「ゾラー」の直に分析、解剖の成績を以て小説となすは諸家の妥当ならずとする所なり蓋し実験の成績は事実なり余輩医人は事実を求むるを以て足れりとすれども小説家は果して此の如くにて可なるや

論の進め方、ゾラへの批判はゴットシャルにほとんど拠っているのだが「蓋し実験の成績は事実なり余輩医人は事実を求むるを以て足れりとすれども小説家は果して此の如くにて可なるや」はもはやゴットシャルの余響ではなくてまさしく鷗外自身の見識の表明としてひびくのである（『若き日の森鷗外』）と小堀桂一郎氏はいう。たしかに、鷗外にとって文学はなにかということが問い直された上で、文学の存在と価値が追求されたのであった。だから「小説家は果して此の如き事実の範囲内を彷徨して満足すべきや若し然りと曰はゞ何の処にか天来の奇想を着け那の辺にか幻生の妙思を施さんや」とか「余は医なり一把解体の刀、久く拳を離れず、一条煮薬の筒、屢々指に触れども事実を捜究するの熱心は未だ曾て無何有の郷に遊ぶの夢を妨げず」と医学と領域も価値体系も異なる文学の存在を主張したのだ。

「分析、解剖の成績」を良材とし、作家の「覚悟（イントゥイション）」（小堀氏はこの語は現在の語彙では「直観」であろうという）によつ

て「無何有の郷」を造型することが小説家の使命であるとした鷗外の念頭には、日本の文学の実状が思い描かれていたに違いない。

「天来の奇想」とか「幻生の妙思」とかいうときに、当代随一の文学者であり理論体系をもつ坪内逍遙を意識しないわけはない。小堀氏は鷗外が読んだ上下二冊の初版本『小説神髓』の書き入れなども参照して、鷗外が『小説神髓』を意識して『小説論』を書いたことは「ほぼ疑いを容れないが」「この論文を以て逍遙と対決せんとしたわけでないことも推知できる」(同上)という。

小堀氏もいうように『小説論』は「他者への警告であるより前に、多分に今後の自分の文学活動へのあらかじめの弁護」(同上)であろう。ただ、文学活動は医事活動と異って、好んではじめたものだった。まして医学者であつてみれば、文学への発言は余技のほかにしか他人はみないだろう。何を好んで文学に関心をもち、また何を求めようとするか。最初の発言はそこに絞られなければならない。医学と文学にかかわる『実験小説論』は恰好の材料だった。『小説神髓』が念頭にあつたかもしれない。だが、己れの決意の表明であればゴットシャルに依りながら、ゾラ批判のなかで行う方がより鮮明になるはずである。

(三)

『小説論』は新聞に掲載されたごく短いエッセイである。決意表明であれば短いことが利点にもなる。第二の論文『文学ト自然ヲ読ム』は明治二十二年五月『国民之友』に発表された。これは四月『女学雑誌』に「しのぶ」の署名で版本善治が発表した『文学ト自然』に対する批判であり、詳細にわたっている。決意表明がすめば早速、異とする論説を論駁する。戦闘的姿勢は、医事活動と同様に真の文学の確立を願う啓蒙的意図から生じたといえよう。

要点は、文学には「美文学」と「科文学」があること。「美文学」の問題としては「美」と「善」を混同することは不可であること。したがって「美」ハ既ニ「徳」ト「不徳」トヲ問フニ違(フエノミヤ)ないこと。「美」は「想」であり、「真」と「善」と異なる所以は「顕象」をもってあらわれること。「自然」から「美」を得ることもあるが、それは「自然」に附帯セル多少ノ塵埃ヲ「想」火ニテ焚キ尽シテ能ク「美」ヲ成セシ」こと。などから「最美、美文学ハ概ネ自然ノ儘ニ自然ヲ写スコトナシ」の命題が正当であることが主張されている。

『小説論』の「天来の奇想」「幻生の妙思」にあたるものが、ここでは「想」にあたり、あきらかでなかった内容がかなり説明されている。

愛ニ自然ノ一「顕象」アリ此「顕象」ヤ因アッテ而シテ生ズ故ニ果ナリ然レドモ又タ能ク他ノ「顕象」ヲ生ズ故ニ因ナリ因耶果耶推シテ千載ノ上ニ溯リ又タ千載ノ下ニ下ルモ遂ニ其窮極スル所ヲ

知ラズ人アリ此無端ノ長鎖ヲ滅裂シ因果ノ圈線ヲ超脱シテ此「頭象」ヲ視ルトキハ「想」生ズ「想」ナルモノハ有限ノ一物ニ就テ無極ノ意義ヲ視ルモノナリ

小堀氏によれば、この部分はゴットシャルの『詩学』の『美と芸術』の冒頭を要約訳出したものだという。原文には長大な論者の書き出しにふさわしい意気込みと調子の高さが漂っており、「鷗外の論文のうちこの部分に基づいた文章が他との比例を欠くほどの高い調子を示していることもうなずけよう」（同上）と続けている。

なるほど、鷗外はゴットシャルの調子の高さを自身の文章に受けついただかもしれない。しかし「無端ノ長鎖ヲ滅裂シ因果ノ圈線ヲ超脱シテ此『頭象』ヲ視ルトキハ『想』生ズ」というところには鷗外自身の、理屈をこえた文学への思いがにじみでているのではないか。陸軍軍医としてドイツに留学し「勉強創作」するためのさまざまな知識を得て、いま日本の医学界にその実をあげようとする鷗外である。だが、同じドイツで青春の内面に深くかかわったことどもは、鷗外をとりまく現実にはまはない。内面の充足を断念するのでないなら、青春に深く刻みこまれた思いは、存在の場をいずれかに得る必要がある。鷗外にとってそういう対象が文学であったのだ。とすればゴットシャルの一文は単なる援用にとどまらず、感情をこめて書きつけるのは当然であろう。

また、ゴットシャルへの共鳴はドイツ自然主義者に対する反撃、ゾラ批判と同じ立場をとらせることになる。小堀氏も指摘している

が、ヨーロッパ文壇に登場したゾラと同じように日本文壇に登場した坪内逍遙に対し、ひそかに己をゴットシャルに擬したということもある。いずれにしてもこの期の文章には一種の調子の高さと執拗さがあるが、ゴットシャル以上に鷗外の美意識や文学観は深まっていた。

『吾局ノ文壇ハ又ター将ヲ得タリ』は『東京医事新誌』五八三号の「緒論」欄に無署名で掲載されたことでもあきらかなように本格的な文学論ではない。詩文と科学は始めから相関渉するところはないが、シルレルのような医学士にして「小詩祖」となった者もいる。日本の医学界に最近「医文兼業者」が出てきた。小池、太皐の登場で「新誌ノ声価ヲ増シタル」を喜び、さらに両者の原稿が寄せられたことを期待しているという編集者としての雑報である。しかし、こんな雑報にも次のように書き記さざるをえなかった。

詩ハ美文学ナリ美術ナリ文ハ否ラズ詩ト文トノ別ハ其發揮スル所ノ想ニ在テ其形ニ在ラズ若シ詩想ヲ發揮シ美術ノ製作力ヲ逞ウセンカ散文モ亦タ詩ナリ譬ヘバ猶ホ稗史小説ノ如シ若シ事実ヲ發揮シ美術ノ寸尺ニ関セザランカ声詩モ亦タ文ナリ所謂教育詩ノ一部、之ニ属ス

『しからみ草紙』創刊までの文学論はわずかであり雑報的なものがほとんどである。だが、そこには現実の次元をこえた「想」にかかわる「無何有の郷に遊ぶの夢」が文学であることが、しきりに強調されている。それは医事活動との補足関係として文学活動があら

われてきたことを示しているのである。

(四)

「余等がしがらみ草紙の発行を企てしも、亦聊審美的の眼を以て、天下の文章を評論し、その真贋を較明し、工竄を披剝して、以て自然の力を助け、蕩清の功を速にせんと欲するなり」(『しからみ草紙』の本領を論ず)と宣言したからには本格的に評論に取り組まねばならない。『しからみ草紙』第二号には、当時の諸説を検討し、それまでの文学観を綜合して『現代諸家の小説論を読む』が掲載された。

小堀桂一郎氏も『若き日の森鷗外』の第三部で「鷗外の小説論のうち最もまとまったもの」といい「一、小説の文体 二、小説の材料 三、小説の方法(実際主義と理想主義) 四、美と善 五、小説のジャンル 六、ジャーナリズムの功罪」の六項目にわけて詳しく考察している。小堀氏にならって要点を記しておく。

冒頭では詩に散文と結ゲンザン語の二体あることが指摘される。(「結語」は Gebundene Rede = 韻文であり「結語」としたのは字義に密着しすぎたか振仮名をそえたと小堀氏はいう) 鷗外は「叙情叙事の結語は叙情叙事の散文と共に行はるべく、有韻の戯曲は散文の伝奇と並び演ぜられるべし」と散文・韻文どちらを重とするものでもないというが、この論文の論点は散文におかれている。題名からしても当然坪

内逍遙の『小説神髓』が視野に入ってくることになるが、散文は「空想以外の物に待つことなくして、此は(引用者注「結語」を指す)ここに待つことあればなり」という鷗外の考えに引きつけて、「詩歌戯曲」の「其主脳とする所のものも」「他の形なく又声なき人間の情即ち是なり」と『小説神髓』の一節を紹介している。要は、散文と結語は偏重せられることなく発展することを願う「想髓は必ずしも形式のために縛せられざるべし」と「想」の確認がなされたのみてよい。

詩の材料については、対象より取りあつかい方を問題にしている。「詩人の材を使ふや、情感を主とすると観相を主とするとの別あり」「観相的詩人は外よりして詩境に進み、情感的詩人は内よりしてこれに入る」として、これも優劣を論すべきでないとする。いずれにしても「小説家の駆使すべきは人間の活現象」であるというのだが、ここでもゴットシャルと並べて逍遙が引きあいになされ「春の屋の云く。小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐと。(小説神髓上巻一九丁裏)ゴットシャルの云く。小説の境地は即ち是れ人生の境地なり」と紹介している。今日、實際派が有力になり、小説の材料として人間の活現象がえらばれ、一生面を開くにいたったと歴史的な展望の下に述べるあたりは(小堀氏によればパウル・ハイゼの『ドイツ短篇集』の序文の一節の援用だそう) 薬籠中のものとして文学界の現状をふまえた発言といえよう。

人間の活現象をいかに小説に形象していくか。この論文の一番の

眼目は方法論にある。ここでも逍遙の「夫れ稗官者流は心理学者の如し。宜しく心理学の道理に基づき其人物をば作るべきなり」という一文が紹介されている。しかし、鷗外は心理的觀察は「作詩の方便にして、その目的にあらず」として、さらに想化作用の必要を説き「これをして美術の境を守らしめんとするには、勢多少の検束を加へ、想化作用によりて自然の汗垢を淨め、制作の興に乗じて、空に憑りて結構せざるべからず」という。「想」や「空」が決定的な役割を果すということが強調されており、後年の没理想論争に通じる逍遙との違いが明らかになっている。

「想化作用」の伴わない「實際小説派」を排することは当然だが、「抽象的理想主義」にも弊害があるとして、鷗外はドイツロマン派と読本を例にあげている。

独逸「ロマンチック」派の小説を見よ。又我邦近代のよみ本類を見よ。渠等は皆殆全く実世界と乖戾するものなり。故に読むものは巻中に於いて、才子にも佳人にも逢ふことあるべしと雖、その才子と佳人とは皆是各一想の擬人法にて得たる類型的才子佳人にして、心理的觀察に依て始めて描写し得べき、特殊の面目ある個想的才子佳人にあらず。

ここには逍遙と同様に勸善懲惡主義への批判がこめられているが、「理想主義の極端」ということで嚴本善治への批判にもつながりがある。

想ふに記者の所謂意匠清潔、道念純高なる理想小説にては、許多

の血なく肉なき抽象的人物ありて、無何有の郷に跋扈せんのみ、さきにも鷗外は「真」「善」「美」を混同する嚴本善治を『文学ト自然』ヲ読ム』で批判した。この論文では、「美」というイデーが現実をふまえて具体的に形象化されるところに芸術の存在価値があることを強調するために女学記者があげられたといえよう。

小説のジャンルやジャーナリズムの巧罪としては「ロマン」複稗と「ノヴェル」単稗をとりあげて、一つの人生を中心に描く単稗が日本に多いことは世界的傾向に通じるとして「人事の糸漸く繁ければ、一人にて其幾千万緒を総把することを得難きは当然の理なり」という。さらに時代の変遷とともに新聞雑誌の発刊が「ノヴェレ」の隆盛に力があるというハイゼの説をうけて「小説」でない「小説」が新聞に盛んに掲載されているとし「夫れ新聞雑誌は巧遅を須るずして拙速を貴び、通篇の局勢を軽んじて一段の精采を重んず」と警告している。

坪内逍遙は勸懲主義や戯作的文学観を否定し、ひたすら模擬によって「人情」を描くことを提唱したが、芸術の価値と独立については明らかでなかった。そういう時に、心理的觀察や分析解剖によって得られた材料を「製作性ある空想」によって小説として形象化していくという考えは、「想」によって芸術の美的価値の超越性と独立が保証されるということを明らかにしたものだ。

この論文はゴットシャルやハイゼに負うところが多いとしても、「その発言が明治二二年の日本文壇に対して如何に裨益するところ

があったか」(小堀桂一郎同上)ということが重要であろう。それならばいかなる必然性によって、鷗外はハイゼやゴットシャルに眼をむけたのであろうか。

(五)

小堀氏は「若き鷗外がドイツ留学中に学び体得してきた文学観が、新興の自然主義一派のそれではなくて(その危険は大いにあったのだ、もし歴史と伝統の重みに対するセンスを欠いた、ただ時の流行にのみ敏感な留学生であったとしたら!)、自然主義のゆき過ぎに警告し、人間の芸術的活動の本源に眼を向けてゆく保守的講壇文学者たちのそれであったことは明治日本の文壇にとって幸運な偶然だったと言わなくてはならないだろう」(同上)という。ハイゼやゴットシャルを手にしたことは偶然であったかもしれない。知的関心や啓蒙的意図から偶然にゴットシャルを手にしたとしても、文学は感情や感覚にかかり、鷗外の主体をぬきにすることはできないから自家薬籠中のものとする過程にはなんらかの必然を考えなくてはなるまい。ましてドイツ留学は鷗外の知的科学的関心を発展させるとともに感情的感覚的側面をひらき豊かにしていった。単に医学という実験的実証的学問にたずさわる人間が、対応物として現実を超越した美の世界に関心をもつようになったということですますことはできないだろう。

ドイツ時代の鷗外の読書については中村ちよ氏の『ドイツ時代の読書調査』(『比較文学研究』6号、『日本文学研究資料叢書』『森鷗外』に所収)により詳細にわたって明らかにされている。読書範囲はドイツ文学ばかりでなく、ギリシャ古典、シェークスピア、バイロン、コルネイユ、ラシーヌ、ツルゲーネフなど英、仏、露、西の文学に及び、その数四五〇冊以上だが、何を何時ごろ読んだのかという推定は困難だという。小堀氏は、ライプチヒ時代は体系的なものでなく手当り次第というような読書だったが、ハイゼの『ドイツ短篇集』の序文を読んで初歩的な文学史の視点が定着し、さらにドレスデンでロートから贈られたケーニヒの『ドイツ文学史』によりドイツ文学史の史的鳥瞰図ができ、留学が終りに近づくに従って「大きなまとまりを持った労多い長篇の読書、そして一方評論、理論的な著作が読書生活中に大きな比重を占めるようになってきたらしい」(同上)という。知的関心の極めて旺盛な鷗外がたどった読書経過としては当然なものともうなずける。しかし、なおゴットシャルに至る契機が問題になる。小堀氏は、鷗外がゴットシャルの二つの著作『Literarische Toltenklänge und Lebensfragen』(『文学の死響と生問』『Poetik』(『詩学』)はベルリン移住後買い求めたという。

ところで、ベルリン時代は鷗外にとって身辺騒然たる時期であった。直接の上司である石黒忠憲軍医監の来独。カルルスルーエの国際赤十字会議とウィーンの国際衛生学会への出張。邦人とのつきあいのわずらわしさ。近衛歩兵第二連隊入隊などがある。鷗外を追っ

て日本にきたエリスなるドイツ女性との関係もベルリン時代におきたことが竹盛天雄氏などによりほぼ確認されている(竹盛天雄『石黒・森のベルリン淹留と懷帰をめぐって』『文学』昭50・9、12、昭51・2)。これらの事情は『妄想』に次のような文章を記させている。

自分は伯林の *garçon logis* の寝られない夜なかに、幾度も此苦痛を嘗めた。さういふ時は自分の生れてから今までした事が、上辺の徒ら事のやうに思はれる。舞台の上の役を勤めてゐるに過ぎなかったといふことが、切実に感ぜられる。さういふ時にこれまで人に聞いたり本で読んだりした仏教や基督教の思想の断片が、次第もなく心に浮んで来ては、直ぐに消えてしまふ。なんの慰藉をも与へずに消えてしまふ。さういふ時にこれまで学んだ自然科学のあらゆる事実やあらゆる推理を繰り返して見て、どこかに慰藉になるやうな物はないかと捜す。併しこれも徒勞であつた。

或るかういふ夜の事であつた。哲学の本を読んで見ようと思ひ立って、夜の明けるのを待ち兼て Hartmann の無意識哲学を買ひに行った。

小堀氏はハルトマンはフィクションであるとしながらも、ベルリン時代に鷗外が哲学へ関心を高めていく「心理的根拠」は十分にあったものであろう(同上)という。その「心理的根拠」こそゴットシャルに注目させたのではないか。

複雑な現実には罅まれ、知性を駆使してこれを明快に裁断しようと

するが、ますます現実に入りこんでしまうことがある。裁断することも逃避することもできないならば、ただ従うより他はあるまい。隊附医官として実務を修得せよと石黒忠憲から命令を申しわたされて「林太郎は唯だ命令を聞くのみ。意見を陳ず可きに非ず」と日記に記すとき、知性は服従しても、ひらかれ、豊かになった感情や感覚は知性のもとに従うだろうか。

ゴットシャルは『詩学』の『美と芸術』の冒頭で、人間の悟性が現象の世界の、原因と結果の連鎖の中に捲きこまれていくときに生じる現象について述べている。

我々がこのような認識態度(引用者注、悟性により、原因と結果の現象世界を相互に関連するまま認識しようとする態度)を捨て、衝動の盲目的な力をたち切り、我々自身の欲望や、物と物との相互関連から切り離して物を眺めるとき、我々の眼前には「イデー」の純粹な世界が開け、この世界の内では我々は個々の対象をその永遠の意味のままに把握し、同時に自ら個々の主体としての永遠の精神の眼を以てそれらの対象を見ることが出来る。

(この文章は鷗外の『文学ト自然』ヲ読ム』をとりあげて、小堀氏が、「想」について鷗外が述べている箇所は、ゴットシャルの『詩学』の『美と芸術』の冒頭の要約訳出したものと、原文を示し逐語訳したもの)

「原因と結果との果しのない連鎖」にまぎこまれた鷗外の感情や感覚を救い出すのは「物と物との相互関連から切り離」された「イデー」の純粹な世界」しかない。ゴットシャルが「講壇的文学者」

以上に鷗外の共感をそそのめるのは当然であつたに違いない。

(六)

明治二十三年一月二十五日発行の『しからみ草紙』四号には前年の批評をとりまとめて『明治二十二年批評家の詩眼』が掲載された。読売新聞に『小説論』を発表して文学活動をはじめてから一年、『しからみ草紙』も四号めを出すことで軌道にのりだしたはずだから、この論文には本格的に批評に取りくもうとする鷗外の意気込みが反映していなくてはならないはずだが、筆鋒は意外にさえない。

ラ、ブリュエルの曰く。美術に完成の度あるは、自然に熟了の期ある如し。この度を知りてこれを受づる人は解趣知味の人なり。これを感じ得せずして彼に偏し此に僻したる物を受づる人は没趣の人なり、未だ味を解せざる人なり。(中略)世に絶頂の審美家は出でずもあれ、せめては此所謂完成の度をだに知る人の批評家となりて、文学の輓推を計れかしと思ふは余等の願なり。

わずか数カ月前に、文学界の「混沌の状」の「澄清」を期して「而してそのこれを致すものは、批評の一道あるのみ」(『しからみ草紙』の本領を論ず)と書いた意気込はどこへ行ってしまったか。「世の絶頂の審美家は出でず」という状況だから「聊審美的の眼を以て、天下の文章を評論し、その真贋を較明」するのではなかった

か。「完成の度」「を知りてこれを受づる」「解趣知味の人」が「文学の輓推を計れ」とは、ものわりのいい老大家の発言と同じではないか。

筆鋒のゆるみは内容の曖昧さにも及ぶ。まず石橋忍月と内田不知庵をとりあげ、忍月は「詩に内外の調和あるを説き、外の調和を格調と名づけ、内の調和を精神といふ。精神は即ち真理の發揮にして、これに繼ぐに余情を以てす。余情とは状し難き景を叙して言外の意を含まするをいふ」と紹介する。続いて不知庵を「格調といはずして風姿といひ、精神といはずして風情といひ、風情に繼ぐに感応を以てす」と概括し「二家皆な想髓を主として風格を客としたり」という。しかし、「不知庵は分明に理想派の旗色を表はしたれど忍月居士は理想派とも實際派ともつかず、これを不知庵に比すれば多少、實際の方へ傾きたりと見ゆ」としている。

この分類はなんのために行つたかは明確でない。「要するに二家は極端實際派、即ち自然派の詩法を奉ずるものにあらず」というのは分類することに意味がなくなるだろう。小堀氏も「文学觀本来の評価とは関係のない文章上の品定めにより適当な花を持たせた形となつた」として「ゴットシャルに借りた、理想、實際二派の図式を通じて物を見る視点がすでに硬化し」「批評眼を不毛にしているという皮肉を見出さざるを得ない」(同上)という。

また、「實際」を排し「理想」を主張することが急であるため、深い理解や手続きをぬきにした批判があらわれる。紅葉の『初時雨』

に対する忍月の批評「小説は作者に空想ありて、宇宙間より材料を取り、是を美術的の象形に収合するもの」だが「空想が求めたる材料を書併ぶるのみを以て小説とはいふべからず。小説は人間の実生活を描造せざるべからず」とりあげ、「小説」という語は、「詩」にかえることができる、「されば是れ詩の積義にて、小説の定義に非ず」と批判する。

ある点では「小説」を「詩」と言いかえることもできよう。だからといって直ちに「小説の定義に非ず」とすることができるか。また、なぜ「小説」でなくて「詩」にしないでならないかは明らかでない。さらに「小説は人間の実生活を模造せざるべからず」とりあげ、「人をして或は空想に待つことなきかと疑はしむべし」というにいたっては牽強付会ということになる。忍月は「小説は作者に空想あり」と明言しているのであるから、その文脈で考えるのが評者のとるべき態度であろう。鷗外の思考と感受性が鈍化し、ゴッツシャルの理論が単なる物差しとしてしか働いていないのである。

しかし、小堀氏も指摘するように「実際に創作に携った、その体験を踏まえて語っている」(同上)ことを思わせる生き生きした個所もある。

結構に重きを置くべきは、固より詩賦に於いて皆これあり。小説独り然らざらむや。然れども其様式に拘泥すべからざること、又小説に若くはなし。小説は殊に其初にて突然粉錯したる人

事の中堅を衝き、此視点より前後に補叙すること多し。

ここには創作に携っている鷗外の息づかいをうかがうことができ。このことが、実はこの論文を薄手な図式的なものにしてしまった要因でもある。以後、文学評論は、めぼしいものは『舞姫』や『うたかたの記』をめぐっての論争にすぎず、再び意欲的な批評に取りくむのは明治二十四年九月『柵草紙』に『山房放語』『山房論文』欄を設けるようになってからであった。

(七)

『明治二十二年批評家の詩眼』が精彩のないものであり、以後しばらく評論に本格的に取りくむことがなかった原因については、『舞姫』執筆の動機やその内容などと深くかわること、ここで詳しくふれる余裕はないので簡単に記しておく。

明治二十二年十一月、鷗外は『東京医事新誌』主筆の座を追放される。この原因についてもいろいろいわれている。「統計論争」をめぐる社内摩擦、日本医学会創設についての批判が、鷗外の上司たち、とりわけ石黒忠憲の不快を買ったことなどがあげられる。

鷗外は直ちに友人たちと『医事新論』を創刊した。明治二十二年十二月に刊行された『医事新論』第一号で『敢て天下の医師に告ぐ』の一文を巻頭に掲載して、追放にひるむことなく以前にもまして戦鬨的に日本医学界批判を展開した。しかし、そこには次の文にみら

れるような悲痛感もただよっている。

余の医林に於けるや現に敗軍の一將たり伶仃孤立、狼の狼を失ひしが如く海月の蝦を離れしが如し何の幸ぞ説賢の眷顧を辱うして、既にその未斑に列することを得、(中略)我実験的医学の前途に白蛇の横れる限り、彼刀筆斗筭の材が堂々たる学問の宮殿に住める限り彼摸稜の手段が天下医事の重機を滞らしむる限りは余は我志を貫き我道を行はんと欲する吾舌は尚ほ在り、未だ嘗て爛れざるなり我筆は猶ほ在り、未だ嘗て禿せざるなり……

「世人は或は応に反動力の此機に乗じて起り洪水横流して余を万頃波底に埋めんことを慮りし」とき「我志を貫き我道を行はんと欲す」れば、文学に注ぐ力も医事活動にまわさねばならず、『しらみ草紙』に注ぐ力も割愛せざるを得ないだろう。

しかし、よりはばしい戦闘的活動を医事評論で展開することで、「伶仃孤立」した鷗外の内面は癒され充足することができようか。家庭に帰っても妻登志子を中心に、ことはこばれ、鷗外の安住する余地はない。ドイツ留学で感情や感覚面での解放を経験した鷗外であれば、「伶仃孤立」の嘆きをうめる世界をいっそう求めることになるのではないか。こういうときに文学は、医学と同様に近代日本に確立されなければならない文化としてよりは己の感情や感覚にかかわる対象として大きな意味をもってくるのではないか。そうなれば批評活動は後退し、創作や作品享受が全面に浮かんでくることになるだろう。

創作活動が前面に浮かぶと、己れの過去の痛みであり、主筆の座追放にもかかわるといわれるエリス事件を創作化したことに対する説明はまだ充分でない。しかし、ここでは『舞姫』を論ずることが目的でないから結論的な叙述にとどめることにする。

エリスは鷗外が断念し、あきらめた夢である。日本までやってきたエリスは、再び遙か遠い異国の地にあり、一年余の歳月はドイツ留学の輝かしい青春の日々と一緒に、エリスを懐しく、美しい、夢の世界の存在とさせた。「伶仃孤立」の遠因は、じつはその懐しい夢の世界にあったのだ。だから「伶仃孤立」の痛憤はいっそうエリスのいる世界を理想の世界としてよみがえらせることになる。「痛切な愛惜」(磯見英夫『啓蒙批評時代の鷗外』「文学」昭47・11)は「伶仃孤立」の嘆きに重なり、カタストロフが計られることにより「我志を貫き我道を行はんと欲す」『敢て天下の医師に告ぐ』ることができる。

「危機」(磯見氏同上)は『しらみ草紙』の創刊とほぼかさなる時点で訪れた。文学活動を本格化していこうとする矢先であった。創作活動であっても、年来の主張を結晶させようと努力することは当然であろう。『舞姫』は野心的な作品だといわれるが、その野心とは日本文学の「澄清」をはかろうとするものである。鷗外が評論を執筆するとき、つねに坪内逍遙の『小説神髓』を意識していたように、『舞姫』執筆のときに、やはり逍遙の『細君』(明治二十二年一月『国民之友』)が脳裏にあったと考えることは不当なことではないと思われるが、これは他日を期して論じることにする。